ＬＣりぽーと
49
2023年3月

〒663-8558 西宮市池開町 6-46
武庫川女子大学言語文化研究所
ilc@mukogawa-u.ac.jp
Tel: 0798-45-3536
Fax: 0798-45-3574

ことばのサロン＆言語文化セミナー＆言語文化研究所フォーラム＆言語文化研究所シンポジウム＆オトナのための日本語塾

2022 年度、研究所では４つの対外的な催し物を行いました。10 月に第 13 回「ことばのサロン」、11 月に「言語文化セミナー」、12 月に「言語文化研究所フォーラム」、そして、3 月に「言語文化研究所シンポジウム」です。またこれらとは別に、「オトナのための日本語塾」を５回開講しました。これらの開催報告を今回のレポートとします。

■第 13 回「ことばのサロン」2022 年 10 月 29 日（土）午後 1 時 30 分～3 時 30 分
テーマ：いまどきのあいさつ
話題提供者：佐竹秀雄（言語文化研究所研究員）

テーマの主旨：あいさつに関して暗黙のルールがあります。いえ、ありました。例えば、朝は「おはよう」、昼は「こんにちは」、夜は「こんばんは」。さて、みなさん、今もこのルールを守っていますか。また、子どものころ、謝るときは「ごめんなさい」と言いなさい、と教えられました。大人になって、「ごめんなさい」「すみません」「申し訳ありません」のどれを一番よく使っていますか。あいさつの大切さについては、改めて言うまでもありません。でも、私たちはその大切さを意識してあいさつしているでしょうか。皆さんと一緒に考えます。

10 月 29 日（土）、２時間の予定で、第 13 回「ことばのサロン」を開催しました。今回のテーマは、「いまどきのあいさつ」です。

21 名の参加者の皆さんから日頃気になっているあいさつにまつわること、また、自身の経験などを披露していただきました。

“参加者の皆さんにできるだけ発言していただこう”というサロンの趣旨通り、話題に関して楽しいおしゃべりが尽きない時間となりました。

■2022 年度「言語文化セミナー」2022 年 11 月 19 日（土）午後 1 時 30 分～3 時 30 分
テーマ：古事記・ヤマトタケルと女性たち
講師：菊川恵三先生（中京大学特任教授）

講演要旨：古事記の中で英雄といえば、ヤマトタケルです。ところが、クマソタケルらを討伐する「西征」と、東国討伐の「東征」では別人のようなのです。その一つが、「東征」には多くの女性が描かれることです。どうやら古事記編者は戦闘そのものより、この女性たちとのかかわりを通して「東征」を描いているようなのです。それはどういうことでしょう。また少し道草をして、「東さん」にだけ「ヒガシ・アズマ」の訓みがあるのかを考えてみます。

今年度は、中京大学の菊川恵三先生をお招きし、「古事記・ヤマトタケルと女性たち」というテーマでご講演いただきました。「西」「南」「北」にはない「東」さんの複数の訓読みについてなど、改めて「なぜ？」という疑問がわいてくる興味深いお話をしてくださいました。

学内外から 35 名の参加があり、非常に関心の高い講座であったことがうかがえます。質疑応答も活発になされました。

■2022 年度「言語文化研究所フォーラム」2022 年 12 月 24 日（土）午後 1 時 30 分～4 時
テーマ：言語文化と言語教育－文章読本から学ぶ－
1．講師：玉井　暲（本学教授、言語文化研究所研究員）
タイトル：「文章読本」から学ぶ読解力と表現力

講演要旨：AI（人工知能）の時代を迎えて、AI は人間に代替する人材となり得るのか、いや人間は、ＡＩ の果たし得ない卓越した能力を備えた人材であり続けることができる（⁉）―、このような難しい問題に直面する時代にあって、私たちの使っている言語（国語）において重要なのは「読解力」なのか「表現力」なのだろうか。どちらも必要で、 不可欠の能力であるのは分かっているにしても、 いま、この究極的な問題を考えてみることは大切だと思います。こうした関心から、日本で出版された数々の「文章読本」を見てみますと、 谷崎潤一郎の『文章読本』（新潮文庫）が興味深く思われます。「文章に実用的と芸術的との区別はない」 と谷崎は断言しました。この発言の趣旨を中心にして、井上ひさし『自家製文章読本』（新潮文庫）、向井敏『文章読本』（文藝春秋）らの文章読本に言及しながら、文章読本から学べることを考えてみたいと思います。

２．講師：川地亜弥子（神戸大学准教授、言語文化研究所研究員）

タイトル：生活綴方・作文教育における子どもの作品と文集－オルタナティブな指導系統案

講演要旨：「文章読本」が、文章の書き方・読み方についての指南書であると仮定するならば、生活綴方や作文教育でそれにあたるものは、文集である。もちろん文集は国定教科書のように権威づけられたものではないことはもちろん、文章の名手から「このように書くと上手な文章が書ける」という文章執筆の「コツ」を述べたものでもない。子どもたちの作品集、言い換えれば、未熟な作者による作品が編まれたものとしての文集が、なぜ子どもにとっての（場合によっては教師にとっての）重要なテキストになるのでしょうか。1920～30 年代の綴方教師の主張を紐解きながら深めます。

３．講師：山﨑洋子（言語文化研究所研究員）

タイトル：「話すこと／書くこと」を育む授業－ファンレイ＝ジョンソンの学校劇から学ぶ

講演要旨：「話すこと／書くこと」の教育は相補関係にある。これを踏まえた日本の学校教育には、1920 年代に盛んに実施された学校劇がある。学校劇は、子どもの語彙・言葉遣い・自己表現・感情表現を豊かにする、と高く評価された。しかし、今日の学校では残念ながら低迷している。そのことは平成 20 年と平成 29 年の『小学校学習指導要領』を比較するとよく理解できる。他方、イギリスの学校教育に目を向けてみると、「学校劇（Drama）」は今も人気の授業となっている。また、学校劇の文化を継承した「話し聴く能力（Oracy＝oral＋-acy（as in literacy））」の授業も着目されている。本フォーラムでは、「話すこと／書くこと」双方をどのように育むかを考えるため、「名文を読む」授業の一事例として、学校劇を考案したイギリスの女性校長・フィンレン＝ジョンソン（1871－1956）の学校劇の内容と方法を紹介します。そして、そのことを通して豊かな言語文化を育むための学校教育の課題について考えてみたいと思います。

本学の教育連携である【大学間教育研究連携】を推進する活動の一環として、2022 年度「言語文化研究所フォーラム」を開催しました。

神戸大学人間発達環境学研究科と連携し「兵庫県下の綴り方教育の歴史と現在に関する言語文化的研究」をテーマに共同研究を行っています。

参加者は、19 名でした。研究者、LC 倶楽部会員等、綴り方教育と言語文化に関心がある方々が参加され、非常に有意義なフォーラムであったと言えます。

■2022 年度「言語文化研究所シンポジウム」

2023 年 3 月 11 日（土）午後 1 時 30 分～3 時 30 分

テーマ：これだけはやめられません－嗜好品の言語文化－

3 月 11 日（土）、「言語文化研究所シンポジウム」を開催しました。今回のテーマは、「これだけはやめられません－嗜好品の言語文化－」です。

1．講師：柴田清継（言語文化研究所研究員）タイトル：東アジア　飲食と言語のよもやま話

柴田講師には、日本を代表する伝統的スイーツである饅頭と羊羹について、東アジア（中国・朝鮮半島・日本）の視野から眺めたお話を披露していただきました。

日本の饅頭と中国・朝鮮半島のそれは見た目や味などが異なることなどをはじめとして、ご自身の中国での体験談をまじえながら、“おいしいお話”をご紹介くださいました。

2．講師：佐竹秀雄（言語文化研究所研究員）タイトル：ことわざに見る酒の“嗜好品力”

佐竹講師は、『故事俗信ことわざ大辞典』第２版に掲載されている「酒」を含むことわざをピックアップし、それらを対象にお話しくださいました。

「酒」を肯定する立場のことわざ、反対に否定する立場のことわざなど、いくつかの視点で分類されたことわざを、ご自身の「酒」にまつわる経験などとからめてご紹介くださいました。

約 40 名の参加者からは活発な質問が相次ぎ盛況のうちに終了しました。

■オトナのための日本語塾

開催日：2022 年 6 月 4 日、7 月 30 日、10 月 1 日、2023 年 1 月 21 日、3 月 11 日

いずれも土曜日 10 時 30 分～12 時 30 分、年 5 回開講

塾長：佐竹秀雄（言語文化研究所研究員）

日本語塾の塾生が自分で見つけた言語の疑問・問題点について議論するというもので、ゼミナール形式で行われています。今年度はおもに「生活の中で、見たり聞いたりした気になる言葉」をミニレポートとしてまとめることを目標にしました。それぞれの気になる言葉について、各個人が考察を行った内容をレポート集として完成させる活動です。

担当：言語文化研究所　岸本千秋・向井弥生　2023 年 3 月